

ものづくり産業を支える仲間たち⑬

電機連合—東芝メディカルシステムズ株式会社・本社那須事業所

今回訪問した東芝メディカルシステムズ株式会社・本社那須事業所は、東北新幹線的那須塩原駅から国道4号線を車で20分ほど南下した大田原市・野崎工業団地にある。緑豊かな田園に囲まれ、自然に融和した野崎工業団地には富士通那須工場や大日本塗料那須工場等も所在し、その中で那須事業所の敷地面積は2万4652平方メートルほどあり、野崎工業団地の中でも中核の事業所となっている。

東芝メディカルシステムズは最先端の医用機器及び機器システムの開発と製造・販売・サービスを貫いて行う国内シェアトップのメーカーであり、また世界においても有数のメーカーである。那須事業所では本社機能を持つとともに「開発」・「製造」を行っており、那須事業所の他に全国各地に販売・サービスの拠点として70余拠点を有している。

主要製品としては、最先端のデジタル画像処理技術を駆使した血管系X線診断装置(アンギオ)、脈動する心臓やその他臓器の形態検査を行うマルチスライスCT装置、腫瘍の識別や血流検査を行うリアルタイム



マルチスライスCT装置の最終検査

3次元超音波診断装置、高速撮影技術の進歩により、造影剤を使わないで血流情報の画像化や脳や心臓の動画撮像などができるMRI装置、血液中の成分を自動的に測定する検体検査システムなど、常に世界の最新医用機器およびシステムの開発・製造にチャレンジしている。

今回見せて頂いたところは、マルチスライスCT装置の製造現場である。マルチスライスCT装置は、人体の周りをX線管球が回転し多くの方向からX線を照射して、人体の情報をコンピューターで処理することによって、人体の断層像を得る装置だ。また複数の断層像を処理することにより3次元画像として表示することも可能とのこと。最先端のマルチスライスCT装置ではX線管球が0.35秒で1回転し、X線を受信する検出器も0.5mm間隔で64列配置されており、短時間で高い空間分解能で多くの画像を収集することにより、心臓の冠動脈の検査を安定して行うことができる。さらに、あらゆるCT検査のさらなる高速化を実現し、患者への負担を低減するとともに、診断精度において飛躍的な向上を図っている。

このCT装置をめぐる環境は精密な検出器技術や高速データ収集・処理並びに画像再構成技術の進展に伴い年々大きく変化している。その根本は、臨床診断性能の飛躍的進歩と同時に、患者への配慮と安全性、



マルチスライスCT装置の製造現場

「人にやさしいCT装置」をコンセプトに開発、製造を行っている。

組立ての基本となるネジで止める作業、最終工程における高速で回転する回転板の検査作業など一つひとつの作業工程に、人への安全性への配慮が感じられた。人間の生命を守り、病気を診断する現場でなくてはならない高度医療機器システムの開発・製造は、時代の要請でもある。

一人ひとりの労働者の顔に、世界の人々の生命を守り、病気を診断するための最先端の医用機器の開発・製造に従事しているとの誇りと責任感がみなぎっていた。(美)

最近、判明したドミニカ共和国の日系移住者の過酷な状況も人ごとではない。日本人自身も海外にいけば外国人労働者なのである。労働組合としても外国人労働者問題を真正面から考える時が来たと言える。金属労協としても、この4月に外国人労働者の受入れについて考え方を策定したこともあり、今号ではこの問題を取り上げた。この特集が、外国人労働者問題を考えるきっかけとなれば幸いである。(美)

SUMMER issue [夏号]

EDITORS

◆最近、人間の生命がとみに軽んじられる事件が続発している。特に弱者である子供を狙った悪質な犯罪の増加は深刻だ。誰人も、人の生きる権利を勝手に奪う権利など絶対に無い。「他人の不幸の上に自分の幸福を築いてはならない」という人間として最低限守るべきモラルの崩壊が社

老・荘・青で活気ある 社会の展望を開く

巻頭言



IMF-JC 事務局長 團野久茂

若い若いと思っているうちに私も早や55歳となった。桶狭間の出陣の際に織田信長が歌った人生50年からすると、すでに人生を全うしたことになる。しかし、まだ人に負けない体力を保持しているつもりである。それにしても、世の中には何と元気な老人の多いことか。反対に若者の引き起こす異常な事件の連続的発生には驚愕するばかりである。人間は年齢と共に体力が低下していくことは避けようもないが、精神的な若さは別である。最近の事例は、若年時から精神的に老け込む者が多いように感じてならない。肉体と精神のバランスが崩壊し始めているとすれば、これは大きな問題である。

新幹線で無償配布されている広報誌「ウェッジ」に掲載されていた記事を紹介してみたい。それによると、「中国共産党の政治用語のひとつに「老・荘・青」という言葉があるとのことであっ

た。この言葉は日本でも最近、時代を読むキーワードとしてにわかに関心アップされてきている。これは世代間闘争でもあった文化大革命(1996~76年)を終息させるため、老年・壮年・青年の三者が一体となって国づくりに当たるべきとの考え方として、当時、登場したものであった。78年の憲法第15条の中に明記されている。

逆に日本ではこのところ、企業、政治の世界でも若いほど業績があがるということで、40代をトップに据える企業が増えているようである。このような風潮に煽られてか、ポスト小泉の有力候補として51歳の安部氏が浮上ってきている。もっとも直近では福田元官房長官の人气が急台頭しているが、これまでの自民党の常識では考えられないことである。これも世代間闘争なのだろうか。一時、沈まんとする夕陽を尻目に上り竜のごとく輝いたホリエモンなど、六本木ヒルズに集う30代・40代の起業家集団が、やる気とチャンスさえあればジャパニーズ・ドリームの旗手にもなれるとの雰囲気を出した。多くのサラリーマンや若者に夢と希望を与えたことは確かである。しかし、結局のところ、人物・カネの経験が浅く、人間が分からずカネで頓挫した姿をみると、若さだけではだめなことは明確となったと言える。かの中曾根元首相も、「日本全体、老荘青が手をつないでいかなければならない」と恨

み節を含めて主張しているが、ある意味、的を得た発言である。

これも同誌に掲載されていた内容であるが、トラブル続きの日本航空は、「ベテランの技術を伝承させるため整備士OBを再雇用して若手と組ませ、整備ミスを防止することにした」とあった。しかし、こうしたことは、ものづくり製造業である金属産業にとっては至極当然のことである。我々にとっては、「棄老」は技術・技能を捨て去ることと同義語である。文字通り、老・荘・青の考え方を実践しているのが、ものづくり製造現場にあることを、改めて認識し合っておきたい。

一方、若年層における厳しい雇用実態を改善することも、労働組合の大きな役割である。景気回復を受けて採用状況は改善してきているものの、パート・派遣労働者のこれ以上の割合増加は何としても防止する必要がある。若者の多くがこうした状況のもとで、社会からの疎外感を味わっているとすれば、放置することはできない。労働組合も組合員だけの会員制クラブであってはならない。また、05年の特殊出生率は1.25と過去最低を記録し、日本は超少子高齢社会へまっしぐらに突き進んでいる。格差社会が言われる中、国民の将来不安が増幅しているだけに、経済・社会構造の改革は待たないである。政府の歳入・歳出の一体改革の行方を見守りたい。

*お詫びと訂正：前号のスクエアの中で、平野文彦氏の役職を「日本大学経済学部部長」と記したが、正しくは「日本大学経済学部教授」ですので、お詫び申し上げます。(IMF-JC組織総務局)